サントリー芸術財団 サマーフェスティバル2014

見どころ・聴きどころ

「歴年」を雅楽版と洋楽版で連続上演
シュトックハウゼンの代表作オペラ「リヒト」は国立劇場で初演された「歴年」から始まった

サントリー芸術財団が8月下旬に行うサマーフェスティバルは、現代音楽をさまざまな視点から紹介する大規模な音楽祭。昨年からはプロデューサー・シリーズという形で、1人の人間に企画を任せる形にリニューアル、昨年は作曲家の池辺晋一郎が、膨大なフィールドで活躍した経験を生かした多様な演奏会を企画して話題となった。

「雅楽版」1977年初演（国立劇場）の上演風景
© 杵島隆

今年のプロデューサーは、元国立劇場演出室長で音楽プロデューサーの木戸敏郎氏が務める。「伝統を創造につなげるにはどうすべきか」というテーマを掲げ、現代作曲家に邦楽器を使った作品を委嘱初演し、多くの現代作曲家が、雅楽や聲明（しょうみょう）、復元楽器などと向き合うきっかけを作った功績は大きく、武満徹の「秋庭歌」もそこから生まれた。

プロデューサーの木戸敏郎氏

その木戸氏が、20世紀を代表する作曲家の1人、シュトックハウゼンに委嘱して1977年に国立劇場で初演したのが、雅楽の舞台作品「歴年」だ。しかし、初演時の非難と酷評にさらされ、以降再演できなかった。

その一方で、シュトックハウゼンは、国立劇場の「歴年」初演の1977年から2003年にわたって上演に1週間を要するオペラ「リヒト（光）」を作曲する。この作品は、ワーグナーの「ニーベルングの指環」のように、「月曜日」から「日曜日」まで、各曜日の名前が付く独立したオペラ7つの連作超大作で、07年に亡くなったシュトックハウゼンの代表作となっている。

その連作「火曜日」の第1幕に「歴年」が組み込まれた。「日本で上演したものと元になる楽譜は同じ。シュトックハウゼンは作曲当初から欧米での再演を考慮し、そのまま洋楽器で演奏できる指定を楽譜に記していたのですが、その洋楽版『歴年』が『リヒト』の原石となったのです（木戸氏＝サマーフェスティバル2014ホームページから）」。

「リヒト」作曲のきっかけが「歴年」だったということは、2005年に来日したシュトックハウゼン自身も会見で話している。20世紀作曲界の巨人の代表作が日本の国立劇場の委嘱で、しかも失敗作と言われた作品から発している事実は興味深い。しかも、今回は「雅楽版」と「洋楽版」という2つの「歴年」を続けて聴くことができる、最初で最後の試みとなるに違いない。

この連続上演は、音楽界の伝説として語り継がれる「歴年」の現代からの再検証と、その後に「リヒト」として発展する異文化の結びつきなどを会場で直接確認することができるという、歴史的な瞬間でもある。

「20世紀の伝言」と題された雅楽版は、木戸氏のその道を開いた、現代音楽の創作のシーンでも活躍する雅楽の豪華な演奏陣がそろう。一方、日本初演となる「洋楽版」では、日本の現代芸術界を代表する音楽家、舞踊家、パフォーマーなどがそろう。

舞台の演出は、演劇、オペラに通じた佐藤信が両演目とも新演出を行い（雅楽版では、木戸氏との共同演出となる）まさに最強の布陣での上演となる。 M

「洋楽版」1993年ライプチヒ公演より
© Stockhausen（Photo：Stefan Müller）